

Title	生保業界における機関経営効率に関する一考察 - 外務員の活動調査結果から -
Sub Title	
Author	梅田浩二(Umeda, Kouji) 片岡一郎
Publisher	慶應義塾大学大学院経営管理研究科
Publication year	1987
Jtitle	
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	修士学位論文. 1987年度経営学 第526号 複写許諾が必要
Genre	Thesis or Dissertation
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001987-0526">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO40003001-00001987-0526</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

学生氏名 梅田 浩二

主査 片岡 一郎

副査 滝沢 茂

所属ゼミナール 片岡 一郎 研

嶋口 充輝

## 生保業界における機関経営効率に関する一考察 — 外務員の活動調査結果から —

生命保険会社が生命保険制度を維持し発展させるためには、剰余金の増加を通じ経営の安全性を高め、なおかつ増配により契約者の実質保障コストを低下させる必要がある。剰余金の増加は利差益、費差益、死差益の三大利源からもたらされるが、本論文は主として費差益にかかわる営業所の生産性向上について考察したものである。

営業所の生産性を向上させるためには、単位契約高当りの給与コストの高い外務員の大量脱落を防ぎ、高度専門職員に育成していかななくてはならない。しかしながら業界内においても、外務員の活動パターンの分析は十分になされておらず、個人の業績を決定づける要素は何であるのか明確になっていなかった。

本研究では、その要素を訪問の絶対量、配分、質として把握、質問紙調査、面接調査を実施した。その結果、上下両グループの外務員の間で最も大きな差異が確認できたのは量についてであった。しかし面接調査の分析を通じて、活動の質の高さが効率的な時間配分を生むと同時に、量の増加をもたらしていることがわかった。

優秀な外務員の成長プロセスは、本人の努力による量の増加が質の向上を生み、それが一層の量の増加をもたらす好成績に結びつくというものである。今迄の問題は、多くの外務員が自分の力で質の向上を達成できずに脱落してしまったということである。本論文ではそれを未然に防ぐために、特に活動の質の向上が効率的な時間配分と量の増加をもたらすという点に着目し、成績の悪い外務員の活動パターンを改善するための提言を行なった。